

## ●「解体新書」刊行の衝撃 1774 年

1774 年の「解体新書」刊行により世人をその論説の精緻なるに驚愕せしめ、天下の俊才をして争いてその学を学ぼうと動かした。眼科学は大いにこの影響を受けた。その理由は

- 1 : 江戸時代の眼科は実証実験に重きを置いた学であったこと。
- 2 : 特に白内障を鍼で治す術が世人を驚喜させていたが鍼治療で白内障が治る理由は誰もわからず。
- 3 : 解体新書は初めて眼球の内景を明らかにした。

白内障手術の効果の理由は不明にしても、初めて眼球の内部構造を見たことが、当時の眼科医を驚愕させ、西洋眼科学へ急接近させた。

## ●オランダ眼科書の輸入 1794 年 と翻訳出版 1815 年

大槻磐水門下の大森寿安が眼科を志し、寛政 6 年にオランダ商館長参府に随行したオランダ医官が携えた医書の中に「ブレンキ (Plenk)」の眼科書があるのを見つけこの書を手に入れた磐水は大森寿安にこれを買うようにと勧めたが、金 2 両と高額なので大森はこれを辞退。杉田玄白門下の市川隆甫が師にこの書を買うよう要請し、この書を宇田川槐園に翻訳を依頼。しかし翻訳を完成せずして宇田川槐園寛政 9 年死去。このあと宇田川家を継いだ宇田川玄真 (榛齋) に大森寿安が翻訳完成を請い、寛政 10 年夏から 11 年春 (1798-99) に全部翻訳。訳書を三部つくり、大森寿安と大槻磐水・杉田玄白に渡す。この訳本を「泰西眼科全書」という。後年文化 12 年 1815 年に杉田玄白の子の杉田立郷がこれを訂正増補して「眼科新書」と改題して刊行。眼科界に大きな影響を及ぼす。

※Joseph Jakob Plenk 1738-1807 眼科・産科・薬物・植物の学に関する多くの著書あり。バーゼル大学などで解剖・眼科・産科を教授。原書は 1777 年初版。1783 年第二版。この二版をオランダ人プロイスカが 1788 年にオランダ語訳したもの。

※宇田川玄真 1769-1834 宇田川玄随・大槻玄澤・桂川甫周についてオランダ語を学ぶ。

※杉田立郷 1786-1845 土生玄碩に和漢眼科学を学ぶ。

## ●シーボルト来朝 1823 年

シーボルト来朝の意味。これまで蘭書の翻訳によって西洋医学の知識を得ていたが、ここに初めて西洋医師から実地に医学を教授されたこと。シーボルトは外科・眼科・産科をもっとも得意とする。眼科を直接シーボルトから教授されたものは、高良齋、土生玄碩。シーボルトは実地に角膜を切開して光彩を切除する「開瞳術」を施す。土生玄碩には、散瞳薬があることを教え、その製法を伝えた。彼の白内障手術と解剖学に基づいた眼病分類の優越、そして所要薬品が優れていた点が世人の注目をひき、西洋眼科学への注目が広がり、実地にシーボルトから白内障手術法などを教授された眼科医師が、以後の日本眼科学の中心となった。

※土生玄碩 1762-1848 当時幕府侍医。代々眼科医の家。京都の和田泰純に眼科学を学び帰国して家学を授かり、白内障手術法を自ら考案。大坂にて三井元儒・高充国と交わり西洋眼科について聞くことあり、以後和漢眼科学に西洋眼科学併せて施術し、文化 7 年 1810 年幕府侍医となる。文政 9 年 (1826 年) シーボルトが商館長随行で江戸に来ると、眼科精通と聞き、シーボルトに面会。

※高良齋 1799-1846 阿波徳島藩士の子。眼科医高錦国の養子となり眼科医に。1817 年 19 才で長崎に出、シーボルトに西洋眼科学を習う。シーボルト帰国の後まもなく 1830 年徳島に戻ったが家業は弟に譲り、天保 7 年 (1836) 大阪に移って開業。著書：「銀海秘録」「眼科便用」等多数。

(医学士 小川剣三郎著『稿本日本眼科学史』(吐鳳堂書店刊 明治 37 年 4 月 11 日)と医学博士 呉秀三著「シーボルト先生 その生涯及び功業」1968 年平凡社東洋文庫刊 (初版 大正 15 年吐鳳堂刊 本文編・資料編の本文編の再刊)) による。